

## 親の働く姿と子ども

～ 「自分ごと」としてのキャリア教育を考える ～

先日の新聞（読売8/3付9面）に短いですが興味深い記事がありました。「親の働く姿を見たことがある子供は、そうでない子と比べて将来働くことを楽しみにしている割合が高い。」というものです。そして、「将来働くことを楽しみにしているか。」については、「どちらかと言えば」も含めて「楽しみ」と答えた子が69.7%でした。また、「親の働く姿を見たことがあるか。」との関係では、「見た」子は働くことへの期待感が高かったとのこと。父親の姿を見た子は6.9ポイント、母親では11.6ポイントもその差がありました。

ところで、文科省が『社会を生きぬく力』の一環として子どもたちに働くことの大切さを学ばせる「キャリア教育」を打ち出して20年あまり。2014年には映画『魔女の宅急便』とコラボして啓発をしたりしました。そして、今、小・中学校では何人ものゲストティーチャーから学んだり、職場体験（中2）やインターンシップ（高校、大学）など、どこも学校外とのつながりを「目玉」にキャリア教育を進めています。

私は中学校の教師でしたので中学生の職場体験のことでお話しします。確かに1週間の体験学習は素晴らしいです。子どもたちにとって学校（授業）を離れてどこかの希望する事業所で働きます。1～2日目は、興味関心もあって本当に目まぐるしい一日です。それが3日目ぐらいになると、少しですが要領も覚え、単調な仕事に「ダレル」ようになります。でも、4日目、5日目にはその仕事の大切さや働くことの意義、人との関係なども考えるようになります。特に最終日は、その事業所の人たちとの人間関係やお客さんとの関係から、学校では経験できない「働く喜び」や「社会性」を学び取ってきます。たった一週間ですが、大人社会を覗くのです。そして、職場のみなさんから大人の一員として支援され、人として成長して学校へ戻って来ます。もっと言えば、大人のみなさんに世界を見る目を育ててもらうのです。残念ながらここ2年間はコロナ禍で難しくはなっていますが、中学生一人ひとりが自分自身の将来を考える貴重な場となっています。

また、かつてこんなことがありました。ある子が車が好きで、自動車のディーラーさんで職場体験をしました。その事業所の方々にていねいに教えてもらい、本人も精一杯「仕事」をしました。また、お客さんにも褒められ、充実した一週間でした。取組みが終わって一月ほどしたころ、彼は言いました。「僕は将来車屋さんになろうと思ってたけど、やっぱり大変さもわかったから悩むなあ・・・。」と。

私、そのとき思いました。職場体験は、その子の将来の職業を決めるものではありません。一番は「働くことの意義」を学ぶことだと思います。「体験して、その仕事が自分にあっているかあっていないかを見るんだったら、五万とある仕事の全部を体験せなあかん。そうではなくて、もっと身近に働くことの意義を学ぶ場があるのでは？」そう思い、子どもに一番身近な親の働く姿に学ぶことが必要ではないかと考えました。キーワードは『生き方』です。どの職場でも大人が働いています。そして、その人には家族があり、中には子どもさんもいる

でしょう。一人ひとりが「どんな思いで働いているのか」を学ぶこと。それは中学生の親につながるところがきっとあるはずです。職場体験で出会ったみなさんと自分の親を重ね、自分の親がどんな思いで働いているのか、あるいは働けなくなったのか、そこを掘り下げることが、中学生の職場体験ではないでしょうか。働くことの喜びやしんどさ、そして、家族を養っていくことの重みなどを、この体験で重ねて考えることが、その子の将来の生き方につながっていくと考えるからです。その意味で、先の新聞記事は子どもたちが「生き方」を考えることに大いに役立つと思います。

小学校6年生や中学校2年生でキャリア教育が熱心に取り組まれています。こうした外部の関わりだけでなく、一番身近な自分の親の働く姿やその思いに重ねる学習も考えていただけたらと思います。キャリア教育は、子どもたちが自分の将来の生き方を考え、人として成長する体験の場であると思います。その点、一番身近なモデルは親だと思います。親に焦点を当て、働く姿や働くことへの思い、さらにはわが子への思いなどを学ぶことは、子どもたちが自分の生き方を考える上での一番の「教材」ではないでしょうか。